

〔嬉遊笑覽器二冊〕繼ぎせるも、貞享の初比は常のきせるみな長ければ、懐に入る、ために作りしなるべし。

〔好色一代男〕女は思はくの外

けんぼうといふ男達略中五服つぎのきせる筒、小者に瓢箪毛巾著ひなびたることにぞ有ける、

〔嬉遊笑覽器二冊〕昔のきせるは皆長く、小者が肩に打かつぎ行さま、古畫に多くみえたり、きせる筒とは、きせるのことにて、今の如くきせるを入る袋にはあらず、きせるらう長き故、多くは烟袋を結付たり、きせるの短くなりしは、懐中することになりてより也。

〔續五元集下〕寶永二年

鼻と頭痛の愈る印傳

花

花見るに憎いきせるや五ふく繼。

〔骨董集上編上〕風呂櫃鼻禪

當時正保寛永は常には煙管をたづさへず、たま／＼遊行の折は、たづさふる事あれども、みづから

懐中せず、奴僕にもたせたるゆるに、丈いと長し、きせるの頭、雁の首に似たるゆるに、雁首の名目

残り、火皿いと大きし、一代男卷之二、寛永比の風體をいへるくだりに、五ふくつぎのきせると

あるは是なるべし略圖

〔烟草百首〕寛永の頃、異國より始て渡る、日本にては假鍮鐵銅等を以て是を造當時のごとき花美にはあらず、至て粗なるものなり、予藏橋藏烟管圖略長サ三尺、竹のらうを用ひず、遊行の時は、奴僕に持す。

〔煙草考〕烟管